

令和五年三月

島根大学法文学部紀要言語文化学科編 島大言語文化 第五十四号 抜刷

訳注『風月小誌』第二号（上）

要  
木  
純  
一

# 訳注『風月小誌』第二号(上)

要 木 純 一

【表紙】

明治十三年六月発行

風月小誌第貳号

風月吟社

【本文】

引

以<sub>レ</sub>花薰<sub>レ</sub>春。花春之香乎。世之文明猶<sub>二</sub>四時之有<sub>レ</sub>春。歌人詩客之發<sub>二</sub>其盛<sub>一</sub>。不<sub>二</sub>獨花之薰<sub>レ</sub>春。凡編而入<sub>レ</sub>冊者。皆文明之香也。春香人聞焉而快<sub>レ</sub>之。況文明之香。感<sub>二</sub>人心<sub>一</sub>者。其為<sub>二</sub>何如<sub>一</sub>歟。雖<sub>レ</sub>然。花可<sub>二</sub>以薰<sub>レ</sub>春。而非<sub>二</sub>花即春<sub>一</sub>也。歌詩可<sub>二</sub>以發<sub>二</sub>文明<sub>一</sub>。而非<sub>二</sub>歌詩即文明<sub>一</sub>也。讀<sub>二</sub>此誌<sub>一</sub>者。謂<sub>二</sub>文明在<sub>レ</sub>此。則非<sub>下</sub>真知<sub>二</sub>文明<sub>一</sub>者<sub>上</sub>矣。然則此誌也不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>以觀<sub>二</sub>文明<sub>一</sub>乎。否否。古人不<sub>レ</sub>曰乎。天不<sub>レ</sub>能<sub>下</sub>舍<sub>二</sub>鶯花<sub>一</sub>而別作<sub>レ</sub>春。則雖<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>歌詩即文明<sub>一</sub>。可<sub>二</sub>以觀<sub>二</sub>文明<sub>一</sub>者。亦不<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>歌詩<sub>一</sub>乎。小誌<sub>二</sub>二号<sub>一</sub>成。把<sub>レ</sub>筆即題。老雨居士。

【訓読】引 花を以て春を薫らす。花は春の(之)香りたる乎。世の(之)文明は猶お四時の(之)春有るがごとし。歌人詩客の其の盛を發するは、独り花の(之)春を薫らすのみならず。凡そ編みて(而)冊に入る者は、皆文明の(之)香り也。春の香りは人焉を聞きて(而)之を快しとす。況んや文明の(之)香りは、人心を感ぜしむる者、

其れ何如と為す歟。然りと雖も、花は以て春を薫らす可きも（而）花即ち春に非らざる也。歌詩は以て文明を發す可きも（而）歌詩即ち文明に非ざる也。此の誌を読む者、文明此に在りやと謂えば則ち真に文明を知る者に非ず矣。然らば則ち此の誌也以て文明を觀るに足らざる乎。否。否。古人曰わらず乎、天鷲花を舍いて（而）別に春を作る能わらず。則ち歌詩即ち文明に非ずと雖も、以て文明を觀る可き者も、亦た歌詩に在らず乎。小誌二号成る。筆を把つて即ち題す。老雨居士。

【大意】序 花によつて春全体が薫るような気がするの、花が春の香りということになるか。この世界の文明なるものも四季における春のようなもので、歌人や漢詩人が文明の繁栄を興すさまは、花によつて春が薫る程度の段ではなく、編集して出版されるような作品はみな確かに文明の香ということが出来よう。春の香りだけでも人は快感を感じるのだから、まして文明の香りは人の心をゆさぶるもの、どれほどすばらしいものであることか。とはいえ、花は春を薫らすけれど、花は春そのものというわけではない。和歌や漢詩は文明の繁栄を興すけれども、それらが文明そのものというわけではない。この風月小誌を読む人が、文明そのものがこの冊子にあると思うとすれば、文明が何たるかを真に知つた人とはいえない。それなら、この冊子は文明を觀るのには足らないということになるかという、いやいやそうではない。昔の人も言つたではないか、鶯や花を除外して、別に春を作ることとはできない、と。というわけでは和歌や漢詩は文明そのものではないが、その文明を感得することができるのも、和歌、漢詩を通して以外ありえない。風月小誌二号が出版されるに際し、筆をとるや一気呵成に序を書かせていただいた。老雨居士。

【注釈】引—文体の一つ。序の短いもの。例えば蘇洵・蘇氏族譜引。薰—香草の意から、自動詞かおる、他動詞かおらす、かおりをつけるの意となる。ここは他動詞。薰製、薰服等の薰と同じ。文明—評の注参照。歌人—和歌を作る人。詩客—漢詩を作る人。詩人に同じ。発—引き起こすこと。発火、発生等の発。ここは、おそらく花が開く、花を開かせる意も兼ねる。于武陵・酒を勸む「花発けば風雨多し」。春香人聞焉—聞は聴覚だけではなく嗅覚にも使う。聞香。文明之香—評の注参照。古人不曰乎—乎の位置が、反語文としては変則。論語・陽貨「堅しと曰わらずや、磨して磷（うす）らがず。白しと曰わらずや、涅して緇（くる）まず（不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、

涅而不緇」の表現が念頭にあるか。天不能舍鶯花而別作春（荻生）但徠集卷十九・唐後詩論の後に題す「万古神奇悉く陳腐に在る也、天は鶯花を舍いて（而）別に春を為さず」。老雨居士―雨森精翁。前出。

編者云、以<sub>レ</sub>花薰<sub>レ</sub>春、自<sub>二</sub>韓文<sub>一</sub>化來。文明之香、蓋本<sub>二</sub>尚書<sub>一</sub>。或評<sub>二</sub>居士之文<sub>一</sub>曰、無<sub>二</sub>一語無<sub>二</sub>來歷<sub>一</sub>。洵然。

【訓読】編者云う。「花を以て春を薫らす」は韓文自り化し來る。文明の（之）香は蓋し尚書に本づく。或るひと居士の（之）文を評して曰く。一語の來歴無き無し。洵に然り。

【大意】編者のことば。「花を以て花を薫らす」は韓愈の文章をうまくひねって作っている。「文明の香」は尚書の文に基づいている。雨森老雨居士の文章に、來歴のない語は一語もないという人がいるが、まことにその通りである。

【注釈】編者―編輯兼出版人嶋根県士族平賀半助（静遠）。韓文―韓愈・雜説其の一「龍氣を嘘ぶけば雲を成す。

雲は固より龍より靈ならざるなり。然れども龍是の氣に乗じ、茫洋として玄間を窮め、日月に薄り、光景に伏し、震電に感じ、變化を神にし、下土を水にし、陵谷を汨む。雲もまた靈怪なる哉。雲は龍のよく靈たらしむる所なり。龍の靈の若きは、則ち雲の能く靈たらしむる所に非ざる也。然れども龍は雲を得ざれば、以て其の靈を神にする無し。

其の憑依する所を失えば信に不可なる歟。異なるかな、其の憑依する所は、乃ち其の自ら為す所也。易に曰く、雲は龍に従うと。既に龍と曰えば、雲之に従う矣」。尚書―尚書・舜典「曰若（こ）に古の帝舜を稽うるに曰く、重

華帝に協い、濬哲文明、溫恭允塞、玄德升起聞こゆ。乃ち命ずるに位を以てす」の「文明」と「聞」。また、泰誓中「善を爲すの至極は、則ち至治馨香なり」、康誥「徳の馨香、祀れば登りて天に聞こゆるを惟わす」の「香」と「聞」を意識しているということであろう。文明を道德的に価値あるものとみなし、それはあたかも香を放つようであり、それが天にまで聞こえる（匂いが伝わる）という点をよしとして、雨森精翁は典故としてしているのである。

來歴―朱熹・呂子約に答うる書「然れども其の説く所の行字も、亦全て來歴無しと為さず」。嚴羽・滄浪詩話・詩法「用字必ず來歴有り」。洵然―詩經・陳風・宛丘「洵に情有り兮」。

百千鳥ももちどり 轉まわる春はるは、桜花さくらばなさきにはひ、橘たちばなのかをれる夏なつは、ほと、きす来啼ききたとよもし、秋風あきかぜのふきしく野のへの、花はなのうへに照る月つきかけさやけく、冬ふゆの山辺やまべの木々のこぬれに、ふりか、れる雪ゆきいさきよし。はた人をこひしのひ、(大御代をいはひたふとふも、皆これ天地おのつからなる神なから道の道にして、倭魂もてよみ出る歌のたねならずやは。かくて、この風月二郎集も、かの四時の移るかごとく、穆の木つがのいや継々に、たのしくさかえ行くものなりけりと、おもひつ、かつ言挙ことあげするものは、神門かむいのおみりて臣守手。

【大意】何百何千と鳥がさえずる春には、桜がさき輝く。たちばなの花が薫っている夏は、ホトトギスがやってきて鳴き声が響き渡る。秋風が次から次へと吹いてくる野原の草花の上に照る月光はさえわたる。冬の山地には、木々のごずえに降り積もる雪が清らかである。さても、人に恋愛し、すばらしいご治世をたたえるのも、どちらとも皆天地から自然に生まれた、あるがままに神のお気持ちにまかせる生き方であり、日本人の精神で創作した歌の題材となつたものなのである。かくして、この風月小誌第二号も、あの四季が巡っていくように、つがの木のようにますますつぎつぎに、うれしくもさかえていくものだなあと、心の中で思ったことをあえて言葉にして表現した私は、神門臣守手と申すものである。

【注釈】百千鳥轉る春―数多くのいろいろな小鳥。古今集「百千鳥さへづる春は物ごとにあたらまれども我ぞふり行く」。古今伝授では三鳥のうちの一つと言われ、鶯の異名とされる。後鳥羽院「百千鳥轉る春の浅緑野辺の霞に匂ふ梅が枝」。桜花さきにはひ―家持「春されば花咲きにほひ」。貫之「今年より春知りそむるさくら花散ると言ふ事はならはざらなむ」。橘のかをれる夏は、古今集「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」。公衡「をりしもあれ花たちばなのかをるかな昔をみつる夢の枕に」。ほと、きす来啼とよもし―虫麻呂「鶯の卵の中に霍公鳥独り生れて・・・飛び翔り来鳴き響もし橘の花を居散らし」。堅魚「霍公鳥来鳴き響もす卵の花の伴にや来しと問はましものを」。秋風のふきしく野への―しくは、しきりに起こる。たび重なるの意の動詞。朝康「白露に風の吹きしく秋の野はつらぬき留めぬ玉ぞ散りける」。為家「秋風の吹きしく野辺の女郎花心と靡く方を見るかな」。月かけさやけく―さやけしは、明るい。明るくてすがすがしい。清い。貫之「秋の月ひかりさやけみもみち葉のお

つる影さへ見えわたるかな」。大鏡・花山「さやけき影をまばゆく思し召しつるほどに」木々のこぬれに——こぬれはこずえ、木末。赤人「み吉野の象山の際の木末にはこども騒く鳥の声かも」。ふりかゝれる雪いさきよし——素性「春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯ぞ鳴く」。いさきよしは、現代の語感と違つて、自然の事物、風景などがひじょうに清らかであることをいう。俊成「いさきよき光に紛う塵なれや御前の浜に積る白雪」。人をこひしのひ、大御代をいはひたふとふ——ここまで、おそらく古今集の春、夏、秋、冬、恋、賀の分類を意識する。皆これ天地おのつからなる——天地自然。この世界を本来のまま、人為を加えないこと。天然。もとは老莊的な思想。本居宣長の直毘靈で神道（神ながらの道）を称揚するに際し、「天地のおのづからなる道にあらず」といつているのに対して、幽冥界を含めてありのままの世界に従う平田神道、出雲大社神道の立場を主張したのであるうか。単なるレトリックとして用いたにすぎないのかもしれない。神なからの道——万葉集「やすみししわご大君かむながら神さびせずと」。人力や他の力を借りるのではなく、神そのものとしての意から、自力を用いず、神の意に任せる態度。神代の昔から伝わり、神慮のまま、まったく人為を加えない道。神代から伝えられた、日本固有の物の見方や考え方。守手が神官として奉ずる神道。書紀・大化三年四月二六日「惟神（かみながら・かむながらの訓）」の分注に「惟神なる者は、神道に随い亦た自ら神道有るを謂う也」とあるのをもとに江戸時代後期頃から言い出されたもので、明治三年一月三日の「惟神の大道を宣揚し給へる詔」以後、一般的に用いられるようになったといわれる（『日国』）。俊魂——やまとだましひは平安時代は實際から遊離した漢才（からざえ）に対して、主に実務的な才能を指していたが、近世以後、ナショナルな日本人固有の精神、日本の美意識を称揚する語となつた。宣長「敷島のやまとごころを人間はば朝日に匂ふ山桜花」。椿説弓張月「事に迫りて死を軽んずるは、やまとだましひなれど」。歌のたね——古今集・仮名序「やまと歌は、人の心をたねとして」。風月二郎集——風月小誌を兄弟に見立てて、二号をその二男とした。筑紫二郎のたぐい。四時——一年の四季。「よつとき」と無理に訓読する必要はあるまい。春・夏・秋・冬。書・堯典「閏を以て四時を定む」。次の句とのころあわせで、笠村「瑞枝さし繁に生ひたる梅の木いや継ぎ継ぎに（水枝指四時尔生有刀我乃樹能弥継嗣尔）」が念頭にあるか。樛の木のかや継々に——樛は梅とも書

く。松の仲間の常緑樹。「つが」は細かな葉が「つぎつぎ」と出てくるのが語源で「つぎつぎ」を導く枕詞。人麻呂「つがのきのいやつぎつぎに（樛木乃弥繼嗣尔）」。たのしくさかえ行く―師光「天地の榮えますべき君が代を伝へしくにも嬉しからずや」。思ひつ、かつ言挙するものは一心の中にとどめず、わざわざ言葉にすること。人麻呂「葦原の瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国」。守手の奉ずる神道を中心とした日本の伝統は、不必要な言挙は不吉としてしないのが原則だが、あえて禁を犯して風月新誌二号を解説し賞賛するという気持ち。万葉集「蜻蛉島大和の国は神からと言挙げせぬ国しかれども吾は言挙げず」。神門臣守手―中村守手。既出。中村家は、古代より勢力をもった神門臣氏を代々称し、出雲大社の神官となった。この時、守手は、出雲大社に鑽火を提供する、熊野大社の宮司。

## 風月小誌第二号

### 1 題画 老雨居士

秋風揺老樹。落葉乱如レ雨。一選不レ逢レ人。鹿鳴山月午。

【訓読】秋風老樹を揺らし、落葉乱ること雨の如し。一選人に逢わず（不）。鹿鳴いて山月午なり。

【大意】（ある絵に付けた詩）絵の中では、秋風が古木を揺らし、雨のように葉が乱れ落ちている。この小道では、人っ子一人会うことがない。さびしい鹿の鳴き声が聞こえる（ようだ）。山中で見る月は、今や南の方の天空に上っている。

【注釈】題画―絵に詩を書き加えること。また、その詩。老雨居士―雨森精翁。居士は多く在家の仏教信者の意だが、ここは信仰に関わりなく公職を引退して家居していることをいうであろう。秋風揺老樹―漢武帝「秋風起り兮白雲飛ぶ、草木黃落し兮雁南に帰る」。古诗十九首「東風百草を揺らす」。耿湣・元丞の杪秋終南旧居を懐うに和し奉る「秋風遠草を揺らす」。老樹は杜甫が好んだ語。杜甫・錦水居止を懐う二首其二「老樹飽くまで霜を経」。



落葉乱如雨―寇准・遠恨「敗葉乱ること雨の如し」。一逕不逢人―逕は径の異体字。韋応物・楊奉礼に答う「秋塘唯だ落葉、野寺人に逢わず」。謝省・晨に巾山に登る「一径人に逢わず、坐ろに聞く松子の落つるを」。鹿鳴―本来は賓客をもてなす意を詠んだ、詩経・小雅・鹿鳴「呦呦たる鹿鳴、野の苹を食む、我に嘉賓有り、瑟を鼓し笙を吹く」に基づく語だが、群れを求める鹿の鳴き声を聞いた人が孤独感を増すような状況に使われるようになった。前句とともに、俊成「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる」を意識するであろう。山月午―山月は山中の月。王勃・夜興「山月秋林を照らす」。月午は、月が南中（午の方向）すること。真夜中。劉禹錫・惟良上人を送る「灯明るく香は室に満ち、月は午にして霜は地に凝る」。

## 2 納涼なつりま

### 釈苔洲しゃくたいしゅう

夜静長橋不起塵。乘涼來趁月明新。垂楊風定湖如練。欄底氷輪倒照人。  
【三号附正誤に「追ハ趁ノ誤」という。今これによりて正す】

【訓読】夜静かにして長橋塵を起てず、涼に乗じて来りて趁う月明新たなるを。垂楊風定まりて湖は練の如し、欄底の氷輪倒まに人を照らす。

【大意】（夏の夜の涼み）夜は静かに更け、人通りのない長い橋（松江大橋）には塵一つたたぬ。涼しくなったので、満月の光を追ってここまでやってきた。先ほどまでしだれ柳に吹いていた風が止まると湖（安道湖）は練り絹のように静かに広がり、橋の欄干の下で水に映った氷の輪のような満月が、さかさまに反射して私を照らしている。

【注釈】納涼―河畔や船上で夕涼みをすること。徐陵・内園涼を逐う「納涼す高樹の下、直ちに坐る落花の中」。

釈苔洲―河野天鱗。既出。夜静―沈約・王中丞思遠の詠月詩に「月華静夜に臨み、夜静かにして氛埃を減す」。不起塵―李白・上皇西巡南京歌十首其九「水緑にして天青く塵を起さず」。乘涼―白居易・夏日閑放「朝景枕簟清く、涼に乗じて一覚睡る」。来―趁は趁の異体字。仄声。追は平声でここに合わない。蘇軾・王定国の馬上寄せ見るるに次韻す「但だ恨む桃葉女を携えざるを、尚お能く来り趁う菊花の時」。月明新―月明は、月が



明るいの意で使うことが多いが、ここは、月明り、月光。新は新月の意味でも使うが、ここは新たに満月になったばかりの月。白居易・八月十五日夜、禁中独り直す月に對いて元九を憶う「三五夜中新月の色、二千里外故人の心」。楊憑・巴江雨夜「芳菲たり無限の路、幾夜月明新たなる」。垂楊―しだれ柳に限らず、楊柳一般。風定―杜甫・茅屋秋風の破る所と為る歌「俄頃にして風定まり雲は墨色、秋天漠漠として昏黒に向かう。湖如練―謝朓・晩に三山に登り還た京邑を望む「澄江静かなること練の如し」。欄底―橋の欄干の下を流れる川。欄下に同じ。真下のずつと下にある感じを強調。水輪―王初・銀河「曆曆たる素楡は玉葉を飄えし、涓涓たる清月は水輪を湿おす」。朱慶餘・十六夜月「昨夜忽ち已に過ぎ、水輪始めて虧くるを覚ゆ」。倒照人―この三字、用例を見ない。確かに奇警。権徳輿・雜言常州李員外副使春日戲題に和す十首其五「簾開きて月人を照らす」。

老雨云。倒照人奇警。恨不使玉池髯仙評之。

【訓読】老雨云う。「倒まに人を照らす」は奇警。恨むらくは玉池髯仙をしてを評せ使めざるを。

【大意】雨森精翁評「倒まに人を照らす」という表現は奇抜で人を驚かせる。こんな表現を好んだ玉池髯仙に評をしてもらえたらよかつたのに、残念。

【注釈】奇警―主に言動が、奇抜で並はずれていること。宋史王珪伝「珪弱歳にして奇警、語を出せば人を驚かす」。玉池髯仙―不明。梁川星巖（一七八九―一八五八）か。江戸時代後期の漢詩人。江戸お玉ヶ池の近くに玉池吟社を興し、髯と奇抜な詩風は著名であった。「恨むらくは」に当時在世でない語気が感ぜられる。あるいは、この風月新誌に、しばしば評をよせている、大沼枕山（一八一八―一八九一）か。梁川星巖の玉池吟社に属し、その詩風を受け継いだか、ひげは生やしていない。永坂石埭（一八四五―一九二四）の可能性もある。明治初年、梁川星巖旧居址に居を構えて玉池仙館を営み、ひげも有名。松江と関係が深く、後に横山耐雪の師となる。安道湖を詠んだ「碧雲湖棹歌」は著名。

### 3 擣衣曲 鱸香

擣衣又擣衣。誰識妾心悲。清風明月下。一春一淚垂。

【訓読】衣を擣ち又衣を擣つ、誰か識らん妾の心の悲しきを。清風明月の下、一春一淚垂る。

【大意】（きぬたを打つ歌）きぬたで衣を打つ、ひたすら打つ。誰が私の悲しさをわかってくれようか。清らかな風、明るい月光のもとで、きぬたを打つことに涙が流れるのだ。

【注釈】擣衣―擣は搗とも書く。擣衣は、布をしなやかにし、つやを出すために、きぬたにのせて槌でうつこと。冬服の準備の為に秋に行われる。夫と離れた妻の孤独な作業として、その音の悲哀とともに詠まれる。李白・子夜呉歌「長安一片の月、万戸衣を擣つ声」。擣衣曲は、樂府名。ただし古樂府名ではない。王建や劉禹錫の詩題に見える。

鱸香―内村鱸香。既出。清風明月―清風朗月とも。南史・謝諶伝「有る時独り酔つて曰く吾が室に入る者は但だ清風有るのみ、吾に対する者は唯だ明月有るのみ」。李白・襄陽歌「清風朗月用いず一錢もて買うを」。風雅な自然として使われる語を用いることによって、女の孤独な悲しみが際立つ。春―脱穀のため、うすで杵を突くような動作。衣に対してはあまり用いない。

老雨云。似古樂府。

【訓読】老雨云う。古樂府に似たり。

【大意】雨森精翁評。古樂府の作風に似ている。

【注釈】古樂府―樂府は、古体詩の一種で、民間歌謡をもとにしたものである。後代のものもさすが、漢魏までの作品が特に素朴で格調が高いとされて尊重された。この詩も、語の単調な繰り返しをいとわず、女性の感情を真率に表出しているところが、アルカイックな面白さがあるというのである。

### 4 有感（感有り）

勉齋学人

新春来往少。披卷独傷心。以三数十年前昔。視三三五日今。人情何反覆。世態幾浮沈。顧道如何耳。高風想展禽。

【訓読】新春来往少なく、巻を披いて独り心を傷ましむ。数十年の昔を以て、三五日の今を視る。人情何ぞ反覆せる、世態幾たびか浮沈せる。道を顧みるに如何ならん耳、高風展禽を想う。

【大意】（感ずるところがあつて）新春のあいさつに行き来することも少なく、書物を開いてひとりぼっちで悲しい思いにひたる。数十年前の昔の自分が、この四五日の自分を見たとするとその違いに愕然としよう。人情はなんと反覆激しいことか。世の中も何べんも浮き沈みがあつた。我がこし道を顧みて、どうであるか、はずべきことがないか、それだけが大切だ。苦難にあつても恬淡としていたという柳下惠のような高い気風を私は慕っている。

【注釈】有感―心が動かされること。主に憂鬱な思いを抱くこと。押韻も陰鬱な侵韻。杜甫の詩に有感五首がある。

【大意】有感―心が動かされること。主に憂鬱な思いを抱くこと。押韻も陰鬱な侵韻。杜甫の詩に有感五首がある。勉齋学人―山村勉齋。既出。来往―行き来することだが、おもに交際、挨拶についていう。倪瓚―北里「舍北舍南来往少なく、自らの野夫の家を覓むる無し」。披巻―書物を開いて読書すること。李世民・帝京篇「巻を披いて前踪を覽る」。独傷心―阮籍・詠懷其一「憂思して独り心を傷ましむ」。三五日―十五夜を指すことが多いが、数日の意に解する。三五は、詩経・召南・小星「慧たる彼の小星、三五東に在り」や「三々五々」のように、少なめの概数を指す。人情何反覆―白居易・太行路「行路難は、水に在らず、山に在らず、只だ人情反覆の間に在り」。世態幾浮沈―楊公遠・程斗山の村居の韻に次す其五「人情冷熱に従い、世態浮沈に任す」。王質・張監税を送る帰去来の歌「世事浮沈す一江の水」。趙孟堅・辛巳除夕「身世幾たびか浮沈せる」。高風―すぐれた風格。夏侯湛・東方朔画賛序「先生の県邑を睹て、先生の高風を想う」。展禽―柳下惠。姓は展。名は子禽。春秋時代魯の国の賢者。孔子に尊敬された。論語・微子「柳下惠士師と為り、三たび黜けらる。人曰く、子未だ以て去る可からざるか、と。曰く、道を直くして人に事うれば、焉くに往くとして三たび黜けられざらん。道を枉げて人に事えんや。何ぞ必ずしも父母の邦を去らん、と」を意識するであろう。

枕山云。造意命筆。急湍行舟。

【訓読】枕山云う。造意命筆。急湍に舟を行る。

【大意】大沼枕山評。自ら構想して、筆を走らせている。急流に船を操るかのような一気呵成の書きぶり。

【注釈】枕山—大沼枕山。東京で評を人づてに頼まれたのであろう。造意—作品の構想をおざなりではなくて自らすること。虞世南・筆髓論「蔡邕張索の輩、鍾繇王衛の流に及んでは、皆造意精微、自ら其の旨を悟る也」。命筆—劉勰・文心雕龍・養氣「意得れば則ち懐いを舒ばして以て筆に命ず」。自分の思いが直ちに筆にのつて作品になるかのような状況をいうのであろう。急湍—急流。墊虞・觀魚賦「魚は未だ驚かずして（而）行を失い、忽ち浪は急湍に（於）達す」。行舟—船を行かせること、すなわち船を操作すること。劉昼・新論・履信「行を立てんと欲すと雖も信を立てざるは、猶お楫無くして舟を行るがごとし」。

5 静遠平賀氏招飲

咏 席上所置盆石一

芝石 牧野氏 因幡鳥取人

（静遠平賀氏招飲す 席上置く所の盆石を咏む）

奇巖磊塊幾孱顔。近在「明窓浄几間。日夕去来雲數片。無心却学主人閑。

【訓読】奇巖磊塊幾つか孱顔、近く明窓浄几の間に在り。日夕去来す雲數片、無心却つて学ぶ主人の閑なるに。

【大意】（平賀静遠氏に招かれて飲んだ。その酒席に置いてあつた盆にのせられた石を詠む）奇妙な岩の大きな塊があちこちごつごつしている。それが眼前附近に、明るい窓されいな机の書齋に置かれている。夕べになると、そとでいくつかの雲が行き来しているが、この岩は平賀氏のものびりしている姿に学んで心動かされる様子もない。

【注釈】平賀静遠—既出。風月小詩の編集者として、たまたま酒席で詠まれたこの詩を採録したのであろう。盆

石—黒い漆塗りの盆上に、数個の自然石を置き、砂を配して、大自然の景観をつくりだす日本独特の伝統芸術。牧野芝石—幕末から明治時代の日本画家、書家。名は順造。泉州堺の生まれだが、鳥取に移り住んだ（一八四〇—一九〇三）。奇巖—巖は岩に同じ。奇岩怪石。特異な形状をした岩石。磊塊—ごろごろとした石の塊。陸游・蔬圃「剪闢して荆榛尽き、鋤犁して磊塊無し」。孱顔—山のぎざぎざになっているところ。また、山が高くけわしいさま。李商隱・荆山「河を押し華に連なり勢い孱顔」。近在—阮籍・詠懷其八「昔聞く東陵の瓜、近く青門の外に在りと」。潔 明窓浄几—明るい窓と清潔な机。明るく清らかな書齋をいう。歐陽脩・試筆・書を学んで楽しみと為す

「蘇子美嘗て言う、明窓浄に筆硯紙墨皆極めて精良なるも亦た自ら是れ人生の一楽と」。日夕たそがれ。詩経・王風・君子于役「日の（之）夕べ矣」。陶淵明・飲酒「山氣日夕に佳し」。去來雲—盧照隣・晩に滹沱を渡り敬んで魏大に送る「風は巻く去來する雲」。無心—とらわれる心のないこと。虚心。陶淵明・歸去來の辞「雲は無心に以て岫を出づ」。

老雨云。意新語穩。

【訓読】老雨云う。意新たに以て語穩やかなり。

【大意】雨森精翁評。斬新な着眼でしかも平穩なことばをつかっている。

【注釈】意新語穩—意新語工をもじった言い方。歐陽脩・六一詩話「聖俞（梅堯臣）常に予に語りて曰く、詩家は意を主とすと雖も、語を造るも亦難し。若し意新たに語工みにして、前人の未だ道わざる所の者を得れば、斯に善と為す也」。前人未踏のアイデアを思いつくと、得てして難解な表現を用いがちだが、奇を衒わず、わかりやすい詩であることをほめているのである。

6 寄<sup>二</sup>懷故人<sup>一</sup>（懷<sup>おも</sup>いを故人<sup>こじん</sup>に寄<sup>よ</sup>す） 四首<sup>よんしゆ</sup>之一<sup>いち</sup> 勝部<sup>かつべ</sup>靜男<sup>しずお</sup> 竹園<sup>ちくえん</sup> 渡部<sup>わたなべ</sup>氏<sup>し</sup> 伯耆<sup>ほうぎ</sup>人<sup>ひと</sup>

世人<sup>せじん</sup>称<sup>せう</sup>劍客<sup>けんかく</sup>。才辨<sup>さいべん</sup>我<sup>われ</sup>尤<sup>もつと</sup>推<sup>おほ</sup>。滿腹<sup>まんぷく</sup>經綸<sup>けいりん</sup>志<sup>こころざし</sup>。半生<sup>はんせい</sup>坎壈<sup>かんらん</sup>時<sup>とき</sup>。他日<sup>たじつ</sup>風雲<sup>ふううん</sup>會<sup>かい</sup>。期<sup>き</sup>君<sup>きみ</sup>縱<sup>てい</sup>騁馳<sup>しゅうち</sup>。至情<sup>しじやう</sup>勞<sup>らう</sup>菽水<sup>しゆくすい</sup>。餘事<sup>よじ</sup>歌詩<sup>かし</sup>を愛<sup>あい</sup>す。他日<sup>たじつ</sup>風雲<sup>ふううん</sup>の會<sup>かい</sup>、期<sup>き</sup>す君<sup>きみ</sup>の騁馳<sup>しゅうち</sup>を縱<sup>ほし</sup>にするを。

【大意】（昔からの友を思つて作つた詩）勝部君のことを世間は劍客といっているが、その学問こそが私が優れていると思うところである。おなか一杯の世を治めようする気迫があつたのに、その半生は苦難の連続であつた。孝行で父母の世話に明け暮れるなか、暇を盗んで詩歌に没頭していた。いつか君を必要とする時代が来る、その時は思いっきり手腕をふるつてくれたまえ。

【注釈】寄懷—自分の思いを伝えること。必ずしも、相手にじかに伝えなくてもよい。故人—古くからの友人。

勝部静男―鳥取県日野出身。もとは医者。幕末に志士として奔走。梁川星巖に詩を学び、漢詩人としても活躍。明治以後、出雲大社宮司、中教正をつとめた後、東京に出て、司法省に出仕（鳥取県立図書館蔵「勝部静男略歴」）。渡部竹園―一八四二―一八七六。渡辺恭平（部、辺どちらも用いる）、竹処。儒医。諱は果。竹園とも号す。天保十三年渡村（現米子）に生まる。医を備前難波氏に学び、医学寮教官となる。また正墻適処等に儒を学び詩文をよくす。明治十九年一月十九日四十四歳を以て卒す（鳥取県郷土誌）。世人称劍客―漢書・李陵伝「臣將に屯迎する所の者は皆荆楚の勇士、奇材、劍客也」。勝部静男は幕末志士として数々の暗殺、テロに関わったという。才辨―弁舌さわやかなこと。後漢書・列女伝・蔡琰（琰は）博学にして才辨有り、又音律に妙たり」。満腹―杜甫・吾宗「語君臣の際に及べば、経書腹中に満つ」。経綸―糸の筋目をはつきりさせて整えることから、国家を治めととのえることに用いる。易・屯「雲雷屯す、君子以て経綸す」。礼記・中庸「唯だ天下の至誠、能く天下を経綸するの大経と為す」。王安石・鄭子憲西齋「詩書は千載の経綸の志」。坎壈―志を得ぬこと。劉向・九歎・離世「志坎壈として（而）違わず」。杜甫・丹青引「但だ看る古来盛名の下、終日坎壈其の身に纏わるを」。至情―まごころ。班固・詠史「聖漢孝文帝、惻然として至情に感ず」。菽水―豆と水。貧しい食事。さらに、礼記・檀弓・下「孔子曰く、菽を啜り水を飲むに、其の飲を尽くさしむ。斯を之孝と謂う」により、貧しい生活の中でも、親に十分孝養を尽くして、その心を喜ばせることをいう。風雲会―君臣が巡り合うこと。王粲・雜詩「遭遇す風雲の会、身を託す鸞鳳の間」。

老雨云。余与静男相識。此作真其小伝也。静男嘗为中教正。不レ得意辞去。聞今官司法省。信否。

【訓読】老雨云。余は静男と（与）相識る。此の作は真に其の小伝也。静男嘗て中教正為るも、意を得ずして辞去す。聞かなく官司法省に官たりと。信なりや否や。

【大意】雨森精翁評。わたしは静男と知り合ひであるが、この作品はその人の略伝といえよう。静男は以前中教正であったが、宿意とちがったので辞職した。司法省で役人をしてしていると聞いたが、信頼できる情報だろうか。

【注釈】小伝―人物の略伝。その人の全体像をすぐに把握できる。李商隱に李賀小伝がある。中教正―明治初期



の宗教政策で大教宣布（神道国教化）運動のために設置された宗教官吏教導職の一つ。明治五年から明治十七年まで存続。中教正は上から三番目の階級。静男は、出雲大社関係で松江に赴任したが、内部争闘や仏教勢力との対立で辛酸をなめたらしい。司法省―明治四年から昭和二十三年まで設置されていた日本の行政官庁。現法務省の前身で刑務所の管理や司法行政などを行っていた。改正官員録明治十二年十月には、司法省管轄下の東京裁判所に、判事として、勝部静男の名がある（出身は島根で、住所は永田町二丁目壹番地）。

7 咏二十六島海苔

（十六島海苔を咏む）

笠山

二八巖礁激浪辺。紫苔繁殖是良田。秋成有候刈于海。東作無<sub>レ</sub>勞種<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>天。初訝<sub>レ</sub>氈毳織<sub>レ</sub>席卷。徐看<sub>レ</sub>鬢髮梳<sub>レ</sub>雲連。喜聞<sub>レ</sub>今歲亦<sub>レ</sub>豐熟。西望<sub>レ</sub>頻垂<sub>三</sub>尺<sub>二</sub>涎。

【訓読】二八巖礁激浪の辺り、紫苔繁殖す是れ良田。秋成候有つて海に于いて刈り、東作勞無くして天自り種う。初めは訝る氈毳席を織りて巻くを、徐ろに看る鬢髮雲を梳りて連なるを。喜んで聞く今歲も亦た豐熟なると、西のかた望んで頻りに垂る三尺の涎。

【大意】（十六島海苔を詠む）二八、十六島（うつぶるい）の海苔岩に波がぶつかるあたり、海苔が繁殖しており、農業に例えればまことに良田であるといえよう。秋の収穫で氣候のよい時をまつて海で刈入をし、春の耕作は、勞せずして天から種がまかれる。初めて見たときは、毛で織つたむしろかと思議に思ったものだが、いまではだんだんと雲の如き黒髪が梳かれてのびていく様子をゆつくり見守ることにしよう。今年は豊作だという喜ばしいうわさ。松江にいる私は、西の方の十六島を見やつては、一メートルにもなるようなよだれをだらだらと垂らしておる。

【注釈】十六島海苔―十六島（うつぶるい）は、島根県北東部、島根半島の北西部にある岬。十六島の当て字については諸説あるが、この詩では、十六の島があるからという単純な説に従つておけばよい。うつぶるいの読みの由来にも諸説ある。古来ウツプルイノリの産地として知られ、特に江戸時代松江藩主松平治郷（不昧公）が宣伝に努めてから、全国的に有名になった。なお海苔は中国でも古くから漠然とノリの類を指している。左思・吳都賦「江籬之



属、海苔之類」。笠山—中村笠山。既出。二八—掛け算の積によつて、十六といわれる島の数を表す。左伝・襄公十一年「凡そ兵車百乘、歌鍾二肆、及び其の鎛磬、女樂二八」。八つの島が二列に並んでいるような見立てもあるかもしれない。巖礁—岩礁に同じ。水面上にわずかだけ姿を現している岩。伝統的な詩語ではなく、おそらく日本近世に生まれた語。激浪—荒く激しい波。潘尼・西道賦「回波激浪、沙を飛ばし瓦を飄す」。辺—本来はふちやへりの意であつて、あたりと訓ずるのは和習。口調がよいので、わざと用いているのだと思う。紫苔—中国では紫色の苔を指していたが、日本では古くからアサクサノリのたぐいを指すようになった。ここは十六島海苔のこと。杜甫・春日江村五首其四「帰休して紫苔を歩む」。繁殖—詩語ではない。孟子・滕文公上「草木暢茂し、禽獸繁殖す」。良田—陶淵明・桃花源記「土地平曠、屋舎儼然、良田美池桑竹の属有り」。秋成—穀物の秋の収穫にたとえる。王僧孺・吏部郎表「秋成春発、必ず暄寒爽う無きが如し」。有候—よい時節、天候になること。陸游・夜庭中に坐す「風雲生ずるに候有り」。現在では、十六島海苔は冬場に収穫（岩からはぎとる）するのが普通である。東作—穀物における春の耕作にたとえる。陰陽五行説において、春の方向は東なのでかくいう。書経・堯典「東作を平秩す」。李白・従弟冽に贈る「願うに余尺土乏しく、東作誰か相携えん」。無勞—働いて疲労することがないこと。世話がいらぬこと。莊子・在宥「必ず静かに必ず清く、女形に勞無く、女精に揺無ければ、乃ち以て長生す可し」。種自天—今も特に種付けはしない天然海苔である。氈毼—毛織の敷物、絨毯。樂府・隴西行「客を請う北堂の上、客を坐せしむ氈氍毹」。瓊の音読みは「しゅ」。日本では、「ゆ」の読みが優勢のようである。織席—陸游・病中絶句六首其一「青箬もて篷を織り昔もて席を織る」。徐看—杜甫・城西陂泛舟（即漢陂）「遅日徐るに看る錦纜の牽かるるを」。鬢髮—黒々とした美しい女性の美しい髪。詩経・鄘風・君子偕老「鬢髮雲の如し、髻を屑しとせざる也」。雲の如しは、髻（かもじ）を必要としない髪の豊富さをいう。梳雲—雲のような髪を梳くこと。劉方平・新春「眠り罷りて雲髻を梳く」。喜聞—うれしい知らせを聞くこと。杜甫に「喜聞盜賊蕃寇総退口号五首」あり。豊熟—穀物がゆたかにみること。史記・趙世家「年穀豊熟し、民疾疫せず」。杜甫・南池「此の物頗る豊熟す」。西望—中村笠山は広瀬の人。この時期、松江に出ていたかもしれない。いずれにせよ、西方にある

十六島を望みやるのである。類垂―司空図・偶詩「歌に当たりて怪しむ莫かれ頻りに涙を垂らすを」。三尺涎―垂涎は食べたくてよだれが流れること。柳宗元・三戒・臨江之粟「門に入れば、群犬涎を垂らし、尾を揚げて皆来る」。垂涎三尺は成語（出处不明）。

老雨云。三四自然。○又曰。海苔俗呼曰「加毛自」。引レ詩太切。○勉齋云。自レ実入レ況。老杜境界。如「領聯」則庶幾。

【訓読】老雨云う。三四自然なり。○又曰く。海苔は俗に呼んで加毛自と曰う。詩を引くこと太だ切なり。○勉齋云う。実入り況に入る。老杜の境界。領聯の如きは則ち庶幾し。

【大意】雨森精翁評。第三句、四句は、その前を受けて自然な流れ。さらに。十六島の海苔は、俗に「かもじ」という。詩経の鄘風・君子偕老「鬢髮雲の如し、鬢を屑しとせざる也」を典故にしているがここにびつたりだ。山村勉齋評。実写から比喩に入っていくのは、まさに杜甫の詩の境地。第三句、第四句は完璧に近い。

【注釈】海苔俗呼曰加毛自―かもじのりは、十六島海苔の俗称。現在も商標等に使われているようである。かもじは、かつらのことで、女性が日本髪を結うときの添え髪的女房言葉。その状態に似ているのである。かもじう。詩―詩経。切―密切、切実の切。びつたりとくつついていさ。勉齋―山村勉齋。既出。自実入況―況は比況。目の前の現実世界から、いつのまにか幻想的な世界に入り込む、詩の作り方をいうのである。老杜境界―杜甫の境地。杜甫はリアリズム詩人としての側面も強いが、例えば、春望や登高のように詩の途中から現実を超えた何かを幻視し始める作風の詩も多い。無量寿経上「比丘仏に白す、斯の義弘深なり、我が境界に非ず」。領聯―律詩の第三句、四句。庶幾―庶は多い、幾は近い。極限にまで増進してほぼ近くなることをいう。完璧に近い、そうあるのが願わしいニュアンスを帯びる。老杜の境界に近いと読んでもよい。易・繫辭下「顔氏之子は、其れ殆んど庶幾き乎」。

8 春日漫吟 三板居士

紅痕已冷滿衣塵。独臥荒村閑却春。憶昔東山長樂寺。雨中同傘看花人。

【訓読】紅痕已に冷やかなり満衣の塵、独り荒村に臥して春を閑却す。憶う昔東山長樂寺、雨中の同傘花を看る人。

【大意】（春の日、なんというわけでもなく詠んだ）俗務の塵にまみれた服にいつのまにか花の散ったあとがついていて冷え冷えと薄れている。ひとりぼっちで荒れ果てた村にごろごろとして、春を楽しむことなく、無駄にすごしている。そういうえば昔東山長樂寺で、雨の中で相合傘で一緒に見たあの女を思い出す。

【注釈】漫吟―特に目的もなく口ずさんだ詩。元結・裴雲客に酬ゆ「甚だ酔つて或いは漫歌し、甚だ閑にしても亦た漫吟す」。三板―清水三板。既出。紅痕―衣服に散った花びらのことであろう。蕭蕭・朝中措「海棠啼きて損ず紅の痕」。滿衣塵―姚合・王玄伯に寄す「夜帰り曉に出づ満衣の塵」。閑却―閑はむなくすること、むだにすること。却是双声による強め。劉長卿・嚴維の諸暨に尉たるを送る「応に憐れむべし釣台石、閑却するは浮名が為なるを」。憶昔―疊韻の語。鮑照・少年時より衰老に至る行に代う「憶う昔少年の時」。東山長樂寺―長樂寺は、京都市東山区円山町にある寺院。建礼門院がここで出家した（平家物語）。転結句は、愛山もいうように、幕末に流行した上方端唄「京の四季」秋の段「秋の色ます華頂山、時雨を厭う唐傘の、濡れて紅葉の長樂寺」を意識するが、それを春の回想に当てはめたのが趣向であろう。同傘看花人―長樂寺は、祇園に近い。芸者との浮かれ歩きであろう。楊巨源・城東早春「門を出れば俱に是花を看る人なり」。

高橋愛山云。転結。自三京之四季謡調一來。○編者云。巧写二旧遊之情況。何等精緻。

【訓読】高橋愛山云う。転結は、京の（之）四季謡調自り来る。○編者云う。巧みに旧遊の（之）情況を写す。何等の精緻ぞ。

【大意】高橋愛山評。転句結句は小唄の京の四季のもじり。編者評。昔京都で遊んだ状況をうまく描写している。なんと詳細でリアルなことか。

【注釈】高橋愛山―高橋基一。松江藩士の家に生まれ、十代藩主・松平定安の侍臣となり、版籍奉還後は定安と藩政改革に着手するなど、松江藩政に深く関わった。東京へ移転後は「朝野新聞」（主に旧松江藩出資）の記者となり、自由党が結成されると党員として活動。何等―どのような意から、いかほどに、なんとまあというニュアンスに広がった。

### 9 咏雁（雁を咏む）

晋齋 田代氏 出雲松江人

淡墨横レ空字々分。嗷々叫入レ晚江雲。雨中月下都多レ感。莫レ使二深閨一婦婦聞。

【訓読】淡墨空を横ぎつて字々分ち、嗷々と叫んで入る晚江の雲。雨中月下都て感多し、深閨の婦婦をして聞かしむること莫かれ。

【大意】（かりを詠む）絵で描いたように薄墨色の雁の群がいくつか空を横ぎつていく。ひとつづつの群れそれぞれが「く」の字をなしているのがはっきり見える。クークーと鳴いてあげがたの川の上に掛かっている雲の中に入っていく。雨の中でも、月の照る下でも、どちらでも人の心を動かす雁の鳴き声。人知れぬ奥まった部屋にたたずむ寡婦たちに聞こえて悲しませないでおくれ。

【注釈】田代晋齋―田代嚮平である。一八三七―一八九五。松江の医師。藩医の家に生まれ、長崎留学、松江に帰って、藩校教授。後医師として開業。剪淞吟社同人の田代活処の父（児島保編著『島根名医列伝』。入谷仙介「横山耐雪著出雲詩綜小伝（訳）」では、田代月華となっている人と思われる。晋齋の号不詳）。淡墨―絵画の描き方を意識した表現。梅堯臣・楊州北門に登る「楼上の山は淡墨の画の如し」。横空―空を横切る。ここでは、あるいは空に横に広がっているの積りかもしれない。虞世南・侍宴応詔、賦して前の字を得たり「空を横ぎつて一鳥度り、水を照らして百花然ゆ」。字々―李白・遠きに寄す十一首其十「行数多からずと雖も、字字委曲有り」。分―分かれて、それぞれがくつきり分明になっている。嗷々―詩経・小雅・鴻雁「鴻雁于き飛び、哀鳴嗷々たり」。多感―心が傷つきやすいこと。杜牧・初春感有り、歙州邢員外に寄す「聞く君も亦た多感、何くの処にか闌干に倚る」

深閨―奥まった女性専用の居室。白居易・長恨歌「楊家女有りて初めて長成す、養いて深閨に在るも人未だ識らず」。孀婦―寡婦、未亡人の意もあるが、ここは既婚で夫が離れて独居する夫人のことかもしれない。鮑照・郷に還るを夢みる「夜分孤枕に就く、夢想す暫く帰ると言うを。孀婦戸に当りて嘆じ、糸を搔きて復た機を鳴らす」。

愛山云。多感。而兼多情者。○編者云。咏物佳品。

【訓読】愛山云う。多感にして（而）多情を兼ねる者なり。○編者云う。咏物の佳品。

【大意】高橋愛山評。多感かつ多情。詠物詩のなかでは絶品。

【注釈】愛山―高橋基一。前出。多情―男女の情愛が深いさま。子夜四時歌・春歌二十首其十「春風復た多情、我が羅裳を吹きて開く」。咏物―咏は詠に同じ。詠物詩。鳥獸草木や自然そのものを主題として詠する詩。国語・楚語上「文は物を詠んで以て之を行る」。范仲淹 林衡鑑に賦する序「其の物を指して詠ずる者は、之を詠物と謂う」。佳品―すぐれた品物。特に文芸作品を指す。許有壬・未央宮瓦硯「世は銅雀を伝え亦た佳品」。

10 遊芳野 次 藤井竹外韻<sup>一</sup>（芳野に遊ぶ 藤井竹外の韻に次す） 蘭窓主人

欲<sup>レ</sup>吊<sup>二</sup>英靈<sup>一</sup>履<sup>レ</sup>險来。静思<sup>二</sup>往事<sup>一</sup>淚先催。我語<sup>二</sup>桜花<sup>一</sup>花解否。万年須<sup>二</sup>護<sup>二</sup>此陵<sup>一</sup>一開上。

【訓読】英靈を吊せんと欲して險を履んで来る、静かに往事を思えば涙先ず催さる。我桜花に語る花は解すや否や、万年須べからく此の陵を護つて開くべし。

【大意】（吉野遊覧。藤井竹外の韻にあわせて作った）後醍醐天皇の立派な御霊をとぶらおうと険しい山を越えてやつてきた。静かに昔のことを思うや涙がどつとあふれる。桜花よ、お前に告げるが、わかってくれるか。お前は、これからも咲き続けて、この後醍醐天皇陵を何万年も守り続けなければならぬぞ。

【注釈】芳野―吉野。かつてはこの表記が優勢であった。後醍醐天皇陵等南朝の遺跡、桜で著名。幕末尊王攘夷の気風の中で、聖地巡りが盛んに行われた。次藤井竹外韻―次韻は、他の漢詩の韻字に合わせて、それと同じ韻字と同じ順序で用いて詩作し、もとの作に対する共感、尊敬を示す作法。藤井竹外（一八〇七―一八六六）は、江戸後期の

漢詩人。名は啓。撰津高槻藩に仕える。頼山陽門下。七言絶句を得意とする。吉野または游芳野と題された、「古陵の松柏天颺に吼ゆ、山寺春を尋ぬれば春寂寥たり。眉雪の老僧時に帯くことを輟め、落花深き処（ところ）に南朝を説く」という作は、吉野三絶（梁川星巖、藤井竹外、河野鉄兜）の一つとして有名。ただし、蘭窓の詩は灰韻で、蕭韻のこの詩に対する次韻とはいえない。竹外の集（竹外二十八字詩、竹外遺稿）にも灰韻のそれらしき作は見えない。案ずるに、これも著名な、菅茶山・芳野に遊ぶ「一目千株花尽く開き、満前唯見る白皚皚。近く人語を聞けども処を知らず、声は香雲團裏自り来る」（灰韻）との混乱があつたのではないか。ただし、茶山の詩と韻字は一致しないので、厳密にいえば和韻といふべきだが、次韻は必ずしも同韻字、同順序とは限らない。いずれにせよ、どの詩も桜を主材料としている。蘭窓主人―坂本蘭窓。前出。欲吊―吊は弔の俗字。英霊―本来は優れた人を指すが、死者の魂を敬って呼ぶのにつかわれる。楊炯・原州百泉県令李君神道碑「英霊已まず、還お命代の期に当たる」。明治以後は、主に戦死者に対する語となつたが、ここでは、後醍醐天皇をはじめとした南朝で戦い死んでいった人たちについていう。履險―険しい・山を踏み越えていくこと。曹植・盤石篇「危きを経て險阻を履む」。困難な世を生き抜くことにも使う。静思―心を落ち着けて冷静に考えること。沈思黙考。賈誼・新書・修政語上「静思して而して独居す」。

頼支峰云。未<sup>レ</sup>経<sup>二</sup>人道<sup>一</sup>破<sup>一</sup>。

【訓読】頼支峰云う。未<sup>レ</sup>だ<sup>一</sup>人<sup>二</sup>の道<sup>一</sup>破<sup>レ</sup>する<sup>一</sup>を<sup>レ</sup>経<sup>レ</sup>ず。

【大意】頼支峰評。まだ誰も言っていないことをよくもまあ言つてのけたことだ。

【注釈】頼支峰―一八二三―一八八九 幕末明治時代の儒者。京都出身。頼山陽の次男。頼三樹三郎の兄。家学をつぐ。東京遷都に際し天皇に随行。昌平学校教授、大学少博士となつた。編者が、東京でつてを求めて評を請うたのであろうか。風月小誌には、東京在住の作者が多い。道破―俗語。（大胆にも）言つてのける。水滸伝第五三回「戴宗道う。我甚麼（なに）を説かん。且く他を道破するを要せず」

〔付記〕本稿は、

科研費基盤研究（C） 研究課題／領域番号222K00340

近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析（期間二〇二二～二〇二四年度 研究代表者 要木純一）

及び、

島根大学法文学部山陰研究センター 山陰研究共同プロジェクト 近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析（期間二〇二二～二〇二四年度 研究代表者 要木純一）

及び

島根大学法文学部山陰研究センター 山陰研究プロジェクト 山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・

公開に関するプロジェクト（課題番号 2205 期間：二〇二二～二〇二四年度 研究代表者 田中則雄）

による成果の一部である。